慈・悲は初地から四地までに、とくに第二・第三地に語られるのであるが、世親は『この地は前地よりとくに慈悲がすぐれているから「大悲」である』といい、その大悲が「現前する」ことについて『不住道行勝によって救済の方便智を具するが故に「大悲が現前する」』と語り、更に、大慈の光明については、この大慈と愍念の光明をもって衆生と関係を保つと語っている。

また、大悲は二種の在り方をもってはたらくと世親は言う。すなわち、一には如実に縁起を観察することによって苦の因・縁・集を観ずる。つまり、衆生の前際・後際を如実に知ることである。第二には、衆生の久遠より具する種々の苦を対象としてはたらく大悲である。いって見れば、第一は衆生の存在性について、第二は衆生の現実性についてはたらくものである。

このように善巧智と観察智とを体とする覚が大慈・大悲をともなって衆生を捨てないというのが㈡不住道行勝の②の項である。

次に㈢の「かのすぐれた果」について簡単に触れておく。

世親は㈠を行ずるものに自ずから備ってくる功徳・功用を㈢に相応させている。彼はその功徳・功用を四種に分別している。

一、すぐれた功徳を摂受すること
二、すぐれた行
三、衆生を成熟すること
四、衆生に順ずるすぐれた世間智を成就すること。

これら一―四は経文と相応するのであるが、紙数の関係上詳説できない。またの機会にゆずりたい。

近世における信越秋山郷の庶民信仰

―黒駒太子信仰を中心に―

豊島　修

近世の庶民（＝農民）は、檀家制度の確立・実施によって仏教と密接な関係をもつにいたったことは周知のところである。しかし、受容した農民側にあっては、仏教を精神的、教養的なかたちで信仰された一面があるとしても、[1]その多くは葬送・年忌などの死者儀礼と除災招福的な現世利益の目的を満たすことによって、仏教を受容していたものと思われる。従って、近世農民の仏教信仰の形態は、教義信条や経典とはなんら関係のないものといわなければならない。その一例として、江戸時代における信越境の秘境秋山郷の黒駒太子信仰をとりあげ、山村農民の宗教生活とその信仰内容にふれて、近世農民の仏教信仰の一端をうかがうことにしたい。

信濃と越後両国の境に位置する秋山郷が世に注目されたのは、越後の縮仲買商鈴木牧之翁が文政十一年にこの境を探訪し、その後『秋山記行』[2]（二巻）と『北越雪譜』[3]（初編巻之中）を刊行したことによるのである。この秋山郷の部落状況について、『秋山様子書上帳』[4]（文政八）、『北越雪譜』（天保六）によれば、信濃秋山に属する秋山、屋敷、和山、小赤沢、上の原、湯本と、越後側の清水川原、見倉、中の平、大赤沢、天酒（のち廃村）、下結

東、逆巻、上結東、前倉を含む十五ヶ村があり、所謂信越両国を併せて秋山郷と称していたようである。又、当時の支配関係は、信濃秋山が支久見郷に属し、江戸初期には飯山藩領で、享保二年以後天領に編入されて、高井郡箕作村の名主島田三左衛門の支配を受け、越後秋山は、当初天領でありながら会津藩の預り地になっていたが、遠隔地のためにほとんど施政がなされていなかったのである。[5]

このように、江戸時代の秋山郷は、行政的には信濃と越後の両国に二分されていたが、地理的にも経済的にも同一の自然条件下にあって、一つの社会を構成していたといえるのである。

秋山農民の具体的な宗教生活は、特定の宗派に属するというよりも、黒駒太子の信仰が仏事的生活の基調にあったことは留意せられる。今その信仰形態を、㈠葬送・年忌の儀礼、㈡開帳、㈢祈禱に分けて指摘できると思われるが、ここでは葬送儀礼と現世利益的な祈禱に視点をおいて検討することにしたい。

先ず黒駒太子信仰の実態については、葬送儀礼に顕著にうかがわれる。『秋山記行』（文政十一）、『北越雪譜』によれば、冬に死者が出ると、豪雪地帯である秋山郷では菩提寺から引導師と僧侶が来れぬため、信濃秋山に属する小赤沢の山田助三郎[6]の持ち伝える「黒駒太子」の畫軸を、「死者のうへに二、三回廻す」という引導作法の風習があった。しかもこの風習が、牧之の訪れた文政十一年以前には、雪の有無にかかわらず「夏冬共」におこなわれていた。菩提寺が舟山の龍言寺（曹洞宗）と定まったのも、「百年には届かず」（『秋山記行』）とあるから、秋山郷では江戸中期頃までこれが一般的な習俗であったことがうかがえる。又、『秋山記行』によると、黒駒太子の畫軸は「太子は黒き馬に乗って傘をさして天へ登る」とある図柄である。これは聖徳太子絵伝の部分図であって、もとはそれで絵解がおこなわれたものであろう。従って、この絵伝を持ってこの村に入って来た遊行の宗教者（ひじり）が、その絵解とともに死者引導をもおこなったことが想像される。

ところで葬送の際、来迎図や十三仏を掛けたり、枕屏風を立てるのが一般的な慣例であるが、秋山郷の場合はいかなる意味があるのであろうか。死者の引導に黒駒太子の畫像をかかげるのは、死者にたいする滅罪と仏教の浄土往生との結合をみることができる。このような庶民信仰としての太子信仰は、既に、中世に浄土信仰とかたくむすんでいた背景がある。五来重教授によれば、中世、とくに鎌倉時代の太子信仰は、浄土信仰と死者追福信仰であり、太子に結縁した庶民は、死者（や生者）の往生と死後安楽を託す対象として太子を求めたといわれ、さらに、このような太子信仰と浄土信仰をむすびつけ普遍化させた背景には、勧進聖の活動があり、とくに東国では、善光寺を中心とする聖が善光寺如来信仰と聖徳太子信仰を伝播して、一般庶民に唱導と勧進をおこなっていたとされている。[7]

鎌倉時代において、太子信仰が浄土信仰とむすびついて一般庶民に信仰されたことは、例えば元興寺極楽坊発見の、聖徳太子立像胎内納入の「しやうぶつ等結縁交名状」[8]（文永五年）の願文に、「たいしの御とくおふせりけ（ば）へし　そせんみちひかせたまいけ（ば）い

て　くほん（九品）のしやうと（浄土）へまいりゆ（候）べきもの也」とあり、太子の御徳によって過去者の浄土往生を願っていることから知り得るのである。又、このような死者往生の前段階には、滅罪の信仰があったと考えられ、上述の聖徳太子立像（文永五年造立）胎内納入の「太子仏供千坏勧進札」の裏面に記す奉加の願文には、「前慈父尊霊往生極楽自身滅罪生善心中祈願決定円満　但馬女」、「為過去慈父也　存母当滅罪生善」などとみえて、死者（過去者）や生者の罪業を消滅して往生を願う、滅罪の信仰が庶民的太子信仰としての浄土信仰に存在したことがうかがわれるのである。

このような信仰の二重構造は、庶民一般の浄土信仰が我が国固有の宗教観念を基底にして成立していることにもとづくもので[9]、そのため死者（や生者）の浄土往生の前段階に、死者の罪や穢を滅除する滅罪の信仰が必要とされたと考えられる。従って、近世庶民においてもこのような宗教意識の変化はあまりないものと思われ、秋山農民も死者に黒駒太子の畫像をかざすことにより死者の罪穢を消滅し、併せて太子に引導されて往生を期する信仰があったと推察される。このことは、陸中地方に分布する「マイリの仏」の伝承からもうかがえる。この行事は、旧十月の特定の日に、マイリの仏とよばれる聖徳太子（黒駒太子）などの畫軸や木像を伝襲する家に、一定の関係者が参会して礼拝する民俗であるが、又、寺のない時に、上述の畫軸（や木像）を死者の枕元（又埋葬の場）に掛け、会衆一同念仏して葬ったと伝えて[10]、秋山郷と同様な引導作法による死者供養の習俗があった。宝暦十三年の『遠野古事記』[11]（巻三）によれば、「古説に昔当所にて寺院無き村里の亡者を葬るに仏持の俗を頼み、所持の仏を棺の先に立て葬り候由申伝候。其仏は弥陀釈迦観音聖徳太子などの尊像なり云々」とあり、この信仰習俗が江戸中期以前には一般的であったと思われる。そして『マイリの仏の縁起』[12]（明和七年）に、太子の「絵像を以て亡者道引」したとあって、陸中農民も太子の絵像を死者に拝ませて、死者の滅罪による浄土往生を願ったことが解されるのである。

ここに、太子の絵像を死者に戴かすことによって、死者滅罪による往生を信じた庶民的太子信仰の一形態が、近世秋山郷と陸中農民の葬送儀礼にうかがえると思われる。それは又、近世農民の太子信仰受容の基盤に、死者の穢を罪とする固有の宗教意識が存在していたといえよう。ところで、このような秋山郷の太子信仰普及の背景には、村落宗教者（＝聖）の活動があったと考えられるが、『秋山記行』は黒駒太子の畫軸を所持する助三郎を「秋山村々の祈禱者」と述べ、具体的に、太子の畫軸で疫病人などをうらなう宗教活動をおこなっている。又、助三郎が太子の畫軸で葬送に携わったことは、現在阿部家が雪時の葬儀などに、経文を唱えながら太子の画像で死者の引導をわたす宗教者の役割を務めていることから想像される。さらに『栄村史』によれば、同家の位牌に延宝九年（一六八一）の初代「治郎右衛門」の名がみえており、既に江戸初期には、この治郎右衛門が絵像で死者に引導をわたす宗教活動をおこなっていたと思われるが、又、彼は善光寺系の聖であったと考えられる。このことは、秋山郷において阿部家を「如来様（の家）」とよび、併せ太子堂・太子像を管理してい

ること、善光寺講が現存するなど[13]、善光寺系聖の活動による太子信仰と念仏信仰の侵透がうかがえるのである。

このように、秋山郷の葬送とむすんだ太子信仰の普及をみるのは、近世初期に、善光寺系聖の太子信仰伝播によって葬送と習合し、この聖の宗教活動を媒介として「往古より黒駒太子の秋山中に流行」（『秋山記行』）させて一般化、固定化したものと解される。そして秋山農民にとっては、死者に太子の畫像を戴かせることによって死者の滅罪による往生を願った信仰であったと考えられる。

ところで、秋山農民の黒駒太子信仰の実態は、葬送儀礼のほか、祈禱にもうかがわれる。とくに秋山農民の現実問題となるのは、疫病や疱瘡などの流行病の発生であり、それに対処すべく真剣な防禦策を抗じている。『秋山記行』によれば、越後秋山のの（野土）、清水川原両村に疱瘡が流行し、村法の定めにしたがって「山へ小屋掛」して病人を村落から追い出している。村落全体の問題として共同体の力で隔離し、疱瘡の怖れを遠ざけたことが知られる。さらに同書は「（上略）太子の掛ものあり、是を持歩行呪に、疫病でも狐付でも平愈必すると云。（中略）右の掛軸を以病人呪に、（中略）多く全快と聞へて、」と記して、疫病人などがでると、助三郎が、所持する黒駒太子の畫軸で疫病人などをうらなったことがうかがえる。それは上述した葬送儀礼において、黒駒太子の畫軸を死者に戴かせることにより死者の滅罪による往生をさせたのみならず、臨終まぎわの重病人[14]や疫病人にたいしても効験があったと受けとられていたことを示すものであろう。

このように、黒駒太子の畫軸で疫病人や重病人をうらなうのは、太子の畫軸に一種の呪力を認め、それによって疫病や重病人の罪と災いを取り除く目的としたことが考えられる。それは本来、疫病などの原因と信じられた怨霊や死霊を鎮める鎮魂の呪術に源を発しているものと思われる[15]。さらに太子の畫軸の呪的な力をより効験ならしめたのは、秋山郷の呪術者（祈禱者）である助三郎が、重病人や疫病人などに現世利益的な念仏の読誦を修したことが大きい。ここに、修験的活動の一面をもつ助三郎の宗教者としての性格がうかがえるのである。ただ助三郎においては、念仏の読誦がどこまで確かであったかは疑問視され、『秋山記行』に述べる「文字さへ知らぬ所ゆゑ、只口の中で何ヶ唱へ」る程度の教養しかもち得なかった宗教者であったのである。

しかしながら上述した如く、助三郎が『笈挨随筆』（巻二、「飛騨里」）などにみえる「亡者の弔ひ祖先の斎非時をつとむ」活動と、多少とも念仏を兼修する呪術的（験者的）活動の二面性を保有していたことは、古代以来民間に念仏と祈禱をひろめた俗聖[16]、即ち庶民宗教者の系譜と伝統につらなるものとして併せ注意すべきである。

ともあれ、秋山農民の現世利益的な信仰を求める意識は、疫病人や重病人の罪と災いを太子の畫像ではらうことによって果たされたと考えられる。そして、験者的（呪術的）性格を有する村落宗教者がその信仰を満たしたのである。このようなところに、秋山農民の太子信仰としての現世利益的な信仰の一面がうかがえると思われるのである。

以上、葬送と祈禱の二点を通じて、近世秋山農民の黒駒太子信仰の実態をうかがってみたが、秋山農民においては、死者や病人の罪穢滅除に願いがあり、葬送とむすんで信仰されているのも、死者滅罪による往生を目的とするものであった。さらに現世利益的な信仰は、病気平癒にあり、崇る霊の鎮魂呪術として受容されていた。そこに民族宗教の呪術性、民俗性と結合した仏教信仰の一端を表出しているが、又、このような信仰は近世一般農民のあり方と通ずるもので、あくまで生活に即した現実の信仰であったと云えよう。もっとも、秋山農民の太子信仰は、先述した如く、年忌法要や春秋二期の開帳にもみいだされるので、さらに追求されねばならないし、他の同時代農民の信仰との比較検討など、残された問題も多いが、今後の課題として考察していきたいと思う。

註

① 『日本仏教史三・近世篇』。
② 『日本庶民生活史料集成』第三巻、所収。
③ 同右第九巻、所収。
④ 『栄村史堺編』（昭39）、所収。
⑤ 同右。『秋山郷―民俗資料緊急調査報告書』（昭46）。
⑥ 山田は阿部姓の誤りといわれる（註②補註参照）。
⑦ 五来重教授「中世の聖徳太子信仰と庶民信仰」（『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究』、所収）。
⑧ 五来重教授編『元興寺極楽坊中世庶民信仰資料の研究、所収）。
⑨ 五来重教授「元極寺極楽坊の法華経と庶民信仰」（五来教授編前掲書三十五頁）。
⑩ 森口多里氏『日本の民俗3・岩手』。その他。
⑪ 柳田国男氏「毛坊主考」（『定本柳田国男集』第九巻、所収）。
⑫ 森口多里氏「マイリノホトケ補遺」（『民間伝承』十六巻七号。
⑬⑭ 註⑤に同じ。
⑮⑯ 五来重教授著『高野聖』。

『大無量寿経』における「道」の語法について

安富信哉

『大経』は「如来の本願を説くを経の宗致と為す、即ち仏の名号を以て経の体とするなり」（教巻）と親鸞によっていわれたように、浄土教の根本経典であり、本願力によって人間が現実世界を生きぬいてゆく原理を明らかにしたものである。したがって本願について、建立の意義、その本質、本願と本願との相互的関係などを直接に研究することは、『大無量寿経』の真髄を理解する上において欠かせないテーマとなっている。

しかしながら、本願の深奥に更に深く達するためには、側面的に考究されなければならない数々の問題がある。その一つとして、従来『大経』の「自然」の意味について度々論究されてきた。それは親鸞において、「自然」の本質が深く問われ、晩年の